

監修のことば

医療に携わる者にとって「人体を知ること」はすべての出発点であり、終わりのない探求の道でもあります。私は内科医として長年患者さんと向き合い、また医療系大学において多くの若者たちと学びをともにしてきました。そのなかで常に感じてきたのは、人体のしくみは私たちの想像をはるかに超える精緻さと調和をもって働いているという驚きと感動、そしてそれを学ぶことが単なる知識の獲得を超えて、「自分とは何か」を理解する深い問いにつながっている、という実感です。

本書『医療系専門科目へ つながる生物学——消化から学ぶ人体のしくみ』は、医療・薬学・看護・リハビリテーションなど医療系を志す学生の皆さんが、専門的な学びへと進んでいくための“橋渡し”となることをめざして編まれたテキストです。しかしそれは、単なる前段階の教科書にとどまりません。ここに詰め込まれているのは、「なぜそうなるのか」「どうして必要なのか」といった根源的な問いへの導きであり、知を有機的に結び、学問を“つながり”としてとらえる知的な喜びでもあります。

本書が扱う「食物の消化」というテーマは、人間の生命活動の最も根源的な営みの一つであり、食べること＝生きることの本質に迫るものです。食物から栄養素を取り入れ、分解し、吸収し、生命活動に利用する——この一連のプロセスは、単なる生理現象ではなく、生命そのものがもつ意志のようなものを感じさせます。私はこの監修を通じて、食という営みを軸にとらえて人体を学ぶというアプローチが、いかに優れた視点であるかを再認識しました。食を起点にすれば、消化器の構造や機能、生化学的反応、ホルモンや神経による調節、さらにはエネルギー代謝のメカニズムなど、学問分野を横断しながら立体的に人体を理解することができます。それはすなわち、生物学・化学・生化学・解剖学・組織学・免疫学といった多岐にわたる知識を一つの“流れ”のなかで自然につなげる学びであり、「知る」ことの面白さに満ちた知的体験です。

また、本書は「BASIC（基礎）」と「ADVANCED（発展）」に二分され、それぞれの段階にふさわしい内容が冊子とWebという媒体に応じて展開されている点も大きな特徴です。知識を積み上げるだけではなく、理解を深め思考力を育てることを目的としたこの構成は、これからの医療教育に求められる学びのかたちを体現しています。とりわけADVANCED編ではやや高度な内容に触れることで、学修者一人ひとりが向き合いながら自らの成長を実感できるようになっています。段階に応じて学びを選び取れるという設計は、まさに現代の学修環境にふさわしいものだと確信しています。

私は、医療に携わるか否かにかかわらず、本書を手にするすべての読者にこう伝えたいのです。人体の学びは単なる試験や進級のための“勉強”ではありません。人間を理解するという学修は、最終的に「自分自身を理解する」という内面的な旅につながっています。そして「食べる」という営みを通してその旅をはじめるとは、医療を志す者にとって、あるいは人生をより深く味わいたいと願うすべての人にとって、かけがえのない財産となるはずです。

本書を通して、皆さんのなかに学びの喜びが芽生え、気づきと「もっと学びたい」という前向きな衝動が生まれることを、私は心から願っています。そして、これから出会う学修の数々が、「つながる学び」として確かな実感をとまって自分のなかに蓄積されていくことを、強く期待しています。

2025年6月

帝京平成大学 学長
冲永寛子